

【第2章】 燕市の概況

第1節 位置・地勢

本市は、新潟県の県央地域、新潟市と長岡市の間に位置し、総面積は110.88km²の都市です。市内には北陸自動車道の三条・燕インターチェンジと上越新幹線燕三条駅の高速度交通機関があり、さらに、国道116号と国道289号、JR越後線と弥彦線がそれぞれ交差する交通の要衝となっています。

市域は、西部の国上山周辺を除いてほぼ平坦な地形となっています。平坦地には、市街地や集落のほか、地場産業である金属加工業を中心とする工業・物流団地が形成され、その周囲に広がる農用地はほとんどが水田として利用されています。また、市内には信濃川、大河津分水路をはじめ、中ノ口川、西川、大通川など多くの河川や、豊かな自然を残す国上山など、美しい自然景観があります。

第2節 沿革

本地域は、江戸時代、信濃川、中ノ口川や西川などの恵まれた水利を利用した米づくりが盛んで、舟運を利用した米や物資の集積地として栄えました。やがて大正時代に入り、鉄道の開通により物流の中心は水上から陸路へと変わりましたが、鉄道網にも恵まれ、商工業は更なる発展を遂げています。

本市は水によって栄えた地ではありますが、同時に水害と闘ってきた歴史を持っています。かつて信濃川、中ノ口川はたびたび氾濫をおこし、多くの田畑、町村が水没しました。明治29年の「横田切れ」と呼ばれる大水害を契機として、明治初期に中断されていた分水路工事が明治42年に再開され、昭和6年に大河津分水路が完成しました。これにより市域の安全が確保され、また湿田地帯だった越後平野の乾田化が進み、豊かな穀倉地帯が誕生しました。

一方で、江戸時代初期に水害により困窮した農民の副業として、和釘の製造技術が導入され、当地域に広まりました。その後、銅器、ヤスリ、キセル、矢立などに技術が広げられました。しかし、時代が変わるにつれ、これらの道具は需要が減り、当地域の産業は大正時代からは金属洋食器、さらに昭和に入り金属ハウスウェア³の製造が活発化してきました。現在では、優秀な金属加工の技術を活かし、様々な分野へ進出し、多角化や高付加価値化の取り組みが進められています。

また、市西部の国上山は名僧良寛が約30年間を過ごした地としても知られ、良寛ゆかりの五合庵や乙子神社草庵などの史跡は、現在、観光名所となっています。さらに、公立学校がなかった江戸後期、約80年間に千人余りの門人を送り出した私塾「長善館」は後年「越北の鴻都」と呼ばれ、多くの有為な人材を輩出しました。

合併の軌跡をたどると、明治22年の町村制施行による「明治の大合併」、昭和28年に制定された町村合併促進法を契機とした「昭和の大合併」などの数回の合併を経て、旧燕市、吉田町、分水町が形成され、平成18年3月20日、3市町の新設合併により新しい燕市が誕生しました。

³金属ハウスウェア:ステンレス製などの食卓用容器および台所用器具を言います。